

アカデミックライティングにおける留学生のインターネット使用 — 韓国人・台湾人留学生のレポート作成過程の分析から —

副田 恵理子

1. はじめに

近年情報メディアの発達に伴い、アカデミックライティングにおいて情報収集のために活用できるリソースは書籍に留まらず、インターネット上のwebサイトや携帯電話のアプリなど多岐にわたる。特に母語以外で文章を作成する際には、書く内容について情報を収集することに加え、必要としている表現を得たり、語彙・文法が適切かどうかを判断したりするなど言語能力を補うためにより頻繁にリソースが用いられる（副田・平塚, 2016）。

中でも近年急速に使用頻度が高まっているインターネットについては、情報の信頼性に疑問がある点やコピーアンドペーストにより書き写しが容易である点など、その使用過程に様々な問題があると思われる。しかし、アカデミックライティングにおけるインターネット使用に焦点を当てた研究は少なく、ライティングの授業においてもインターネットの使用方法やインターネットで得た情報を文章内に適切に取り込むためのスキルが積極的に取り上げられることはなかった。そこで、本研究では、日本語学習者がアカデミックライティングにおいてどのようにリソースから情報を得、それを文章内でどのように活用しているのか実態を調査することにより、適切にインターネットを活用するために必要となるスキルを明らかにしたい。

2. 先行研究

Jones (2002) はアメリカの大学生1,000名を対象とした大規模調査を実施し、大多数の学生がインターネットは大学での学びにプラスの影響を与えていると考えており、学習のリソースとして図書館よりもインターネッ

トを利用している学生が7割以上いることを明らかにしている。この傾向は現在さらに加速していると考えられ、アカデミックライティングにおいてもリソースとして書籍や雑誌よりもインターネットが頻繁に利用されていると思われる。

アカデミックライティングにおけるインターネットの使用については、主に3つの観点の研究が見られる。一つ目は、閲覧する web サイトの信頼性、有用性に関するものである。Stapleton (2005a) は43名の日本人大学生の英語のエッセイとインターネット使用に関するアンケートへの回答を分析し、彼らがどのような web サイトをリソースとして利用しているのか、その web サイトが大学での課題作成にふさわしいサイトであるのかを調べた。その結果、彼らの利用していた web サイトの中には大学でのレポート作成には不適當なものも相当数含まれていた。この調査結果や他の先行研究を踏まえ、Stapleton (2005b) は web サイトをリソースとして使用する際には思想的に偏りのある情報が多く含まれていることを理解し、web サイトを批判的に見て適切なものを取捨選択する必要があると述べている。そして、このようなインターネットリテラシーを大学において身につけさせる必要があると唱え、その指導方法を提案している。Zulfitriani 他 (2014) は4名の大学生の研究ペーパーとインタビューデータを分析し、彼らがインターネット上の情報は常に信頼できるわけではないと考え、「権威性」「即時性」「内容」の3点を基準に取捨選択していることを明らかにしている。

2つ目に、引用の難しさに関する研究も多数見られる。不適切な引用(盗用)の問題は書籍や雑誌が一般的にリソースとして利用されていた時代からもあったが、Eisner & Vicinus (2008) が指摘しているように近年インターネットの普及により盗用がしやすい環境となったと言える。しかし、盗用を行った意識がなくても、リソースから得た表現・文・文章を言い換えが不十分なままに論文やレポートの中に取り込んでしまうと「表現の盗用」や「パッチワーク文⁽¹⁾」のような問題が起こる(吉村,

2013)。そして、吉村（2017）は、これは倫理の問題ではなく、多くの場合語学能力の問題であると指摘している。前述した Zulfitriani（2014）の調査でも4名の大学生はパラフレーズをしたり、要約をしたり、直接引用を用いたりするなどして適切に引用すべきことはわかっているが、彼ら自身の言葉で言い換えることの難しさ等から適切な引用が行われていない実態が明らかになっている。日本語学習者を対象とした研究においては、鎌田（2017）が言い換え（パラフレーズ）の難しさを指摘し、引用する際に適切なパラフレーズができるようになるための指導の必要性を唱えている。また、二通（2007）は、引用を行う際には、文献の正確な理解、目的に合わせた引用形式の使い分け、適切な言い換え・要約等、読解から文章作成に至る様々な日本語のスキルが必要になると述べている。中村他（2016）は日本語学習者の不適切な引用を分析した結果、様々な要素についての不適切性が混在している点を指摘し、適切な引用を行うためには、「必要性」「データの質」「引用形態」「引用形式」など様々な要素について、「全体の構成」「論の展開」「引用の目的」に合致するよう整える必要があると述べている。

アカデミックライティングにおけるインターネット使用は上記のような問題があるにもかかわらず、一方で言語的問題を解決する手段としては有用であることを示している研究が複数ある。Conroy（2010）はオーストラリアの英語を非母語とする大学生にコーパス検索ツールや google 検索、辞書サイト等のインターネット上のツールの使用法を指導し、その前後でアカデミックライティングでの誤用修正の能力に違いがあるかを計った。その結果、指導後は自力でインターネット上のツールを使いこなし、誤用修正を行えるようになる傾向が見られた。Acar 他（2011）はフレーズ検索⁽²⁾の仕方など効率的な検索方法を指導することによって、どの程度文章の文法的な改善が見られるか実験を行った。その結果、全ての学生が文章中の25%前後の文をより良い文に修正していた。

以上のように、先行研究からはインターネットの使用は言語的な問題を解

決するツールとしてはある程度有効に機能しているが、内容面の情報収集においては情報の信頼性や引用の適切さなどに問題が見られることが明らかになっている。しかし、これらを包括的に見てインターネット使用状況を分析した研究はほとんどない。また、上記研究はインタビューやアンケート、実験的調査をもとに分析しており、学習者が認識していない問題についても明らかにするためには、実際の使用状況を観察する必要があると考えた。そこで、アカデミックライティングの一つとして、学部留学生が日本人学生と同等のライティングスキルを求められる学部授業のレポート課題を取り上げ、留学生が実際にレポートを作成している過程を調査対象とした。そして、その過程をビデオ録画し、留学生がどのような場面でインターネットを使用し、その情報を文章作成においてどのように活用しているのか分析を行った。

3. 調査概要

3.1 調査協力者

日本の大学に交換留学生として1年間在籍していた韓国人留学生4名、台湾人留学生5名から協力を得た。日本語レベルは調査実施時に協力者Bが日本語能力試験N2、他の協力者がN1取得者であった（次頁表1参照）。

3.2 調査方法

後期の授業で課せられた学期末レポートを作成する過程の一部（約60分）をビデオ撮影し観察した。調査は2015年、2016年の1月に行った。録画時間を60分に限定したのは、これ以上の時間ビデオ撮影することは調査協力者の負担になると考えられたためである。データ収集は大学内の談話スペースを利用して行ったが、レポート作成にはできるだけ調査協力者自身のPCを使用するよう指示した。これは普段使用している機能をそのまま使えるようにするためである。また、レポート作成に必要な全ての資料や書籍を持参し、必要に応じて使うように指示した。ビデオ撮影は2台のビ

デオカメラを用い、PC画面が見えるアングルと調査協力者の視線や全体的な動きがわかるアングルで撮影した。レポート作成終了後には1週間以内に各行動の理由や目的などについてフォローアップインタビュー（FUI）を行い、これをICレコーダーで録音した。

表1：各調査協力者の詳細とレポートのテーマ

協力者	国	日本語レベル	レポート①			レポート②		
			授業名	レポートテーマ	段階	授業名	レポートテーマ	段階
A	韓国	N1	心理学	経験をもとに自分の感情を分析	書き始め			
B	台湾	N2	身体表現論	日台の身体表現の比較	書き始め			
C	台湾	N1	日本文学	ミステリー作品を分析	書き始め	日本語学	学習者の観点から日本語を分析	途中
D	台湾	N1	日本文学	ミステリー作品を分析	書き始め	日本語	日台の祭りを比較	途中
E	台湾	N1	日本文学	アニメ作品を分析	書き始め	日本語	日台の映画を比較	途中
F	韓国	N1	日本文学	アニメ作品を分析	途中			
G	韓国	N1	日本文学	少女漫画を分析	途中			
H	韓国	N1	日本文学	少女漫画を分析	推敲			
I	台湾	N1	日本文学	少女漫画を分析	推敲			

3.3 レポートのテーマ

調査時に各協力者が書いていたレポートのテーマは表1のとおりである。授業はすべて文学部の授業である。どのレポート課題においても複数のテーマが用意されており、その中から一つを選び半年間の授業内容を踏まえてレポートをまとめるというものであった。協力者C・Dは最初の20～30分間一つ目のレポート（レポート①）に取り組んでいたが、作成に行き詰まり、途中から違うレポート（レポート②）の作成に取り組み始めた。協力者Eについては2つのレポートの内容が似ていることもあり、レポート①②を同時平行で作成していた。各レポートの作成段階は協力者A～Eが書き始め、F・Gが書いている途中、G・Hは日本人の友人にネイティブチェックをしてもらった後の推敲段階であった。

3.4 分析方法

ELAN⁽³⁾を用いてレポート作成過程のビデオ録画データにリソース使

用を含む各行動についての注釈付けを行った。それをもとにインターネットを含む各リソースの使用にかけた時間を測定した。また、ビデオ録画データとフォローアップ・インタビュー（以下 FUI と略する）の録音データを質的に分析し、インターネット使用における問題点を洗い出した。

4. 結果と考察

4.1 インターネットの使用状況

協力者のレポート作成過程を観察したところ、全体の20～50%の時間をリソース使用に費やしており、リソースとしてインターネット・書籍・スマートフォン・プリント⁽⁴⁾・友人⁽⁵⁾を使用している様子が見られた（表2参照）。中でもインターネットは全ての協力者により用いられており、協力者Aを除いては60分の中の10～20%前後を費やしていた。これは、書き始めの段階だけではなく、途中、推敲段階においても同じであった。しかし、課題によって差が見られ、協力者A・Bのように自分の経験や台湾での知識を生かせる課題を書く際にはインターネットの使用時間は比較的短かった。

表2：各リソースの使用時間 ※ ()内は全体(1時間)に占める割合

	リソース使用時間	インターネット	書籍	スマートフォン	プリント	友人
A	13:41(22.8%)	02:09(3.6%)			10:16(17.1%)	01:17(2.1%)
B	22:33(37.6%)	05:44(9.5%)	03:58(6.6%)	00:29(0.8%)	11:56(19.9%)	00:27(0.8%)
C	21:05(35.1%)	12:23(20.6%)			05:31(9.2%)	03:12(5.3%)
D	26:43(44.5%)	07:39(12.8%)	12:48(21.3%)		03:08(5.2%)	03:08(5.2%)
E	12:13(20.4%)	08:24(14.0%)			02:06(3.5%)	01:43(2.9%)
F	13:17(22.1%)	07:52(13.1%)		03:47(6.3%)		01:38(2.7%)
G	22:10(36.9%)	14:04(23.4%)	02:32(4.2%)			05:34(9.3%)
H	20:12(33.7%)	07:52(13.1%)			07:47(13.0%)	04:33(7.6%)
I	30:30(50.8%)	07:20(12.2%)			18:48(31.3%)	04:22(7.3%)

課題による違いは2つの課題についてレポートを作成していた協力者C・D・Eについても見られた。2つの課題でリソースの使用状況を比較すると、レポート①作成時よりも、自分の経験や台湾についての知識が活かせるレポート②のほうがリソース使用時間の全体に占める割合は急激に

減少していた（表3参照）。また、インターネット使用については、協力者Cはレポート②ではインターネットを使用せず、また、協力者Eはレポート①と比較して②での使用

表3：レポート①②のリソース使用時間

	①②に費やした時間	レポート①		レポート②	
		リソース使用時間	インターネット使用	リソース使用時間	インターネット使用
C	①27:50 ②32:10	19:46 (71.0%)	12:23 (44.5%)	01:19 (4.1%)	
D	①19:33 ②40:27	17:03 (87.2%)		09:40 (23.9%)	07:39 (18.9%)
E	①17:35 ②42:25	05:03 (28.7%)	04:48 (27.3%)	07:10 (16.9%)	03:36 (8.5%)

割合は低かった。一方、協力者Dについてはレポート①作成時はその時間の多くが課題となっている書籍の読解に費やされておりインターネット使用が見られなかった。

インターネットは内容面の情報を収集する際と形式面の情報を収集する際の両方に使われていた。表4はインターネット使用時間に占めるそれぞれの割合を示したものである。協力者に各行動の目的について尋ねた FUI からは、自分が書きたいと考えている内容・意見をそのまま日本語で述べてい

表4：インターネット使用の内訳

	内容面の情報収集	形式面の情報収集
A	00:00 (0.0%)	02:09 (100.0%)
B	00:00 (0.0%)	05:43 (100.0%)
C	12:23 (100.0%)	00:00 (0.0%)
D	01:46 (23.1%)	05:53 (76.9%)
E	03:31 (41.9%)	04:53 (58.1%)
F	03:10 (40.2%)	03:37 (46.0%)
G	10:23 (73.8%)	03:41 (26.2%)
H	07:06 (90.3%)	00:46 (9.7%)
I	07:20 (100.0%)	00:00 (0.0%)

る web サイトを探しているケースがあることがわかった。この場合には内容面で自分の考えの根拠となる情報を検索していることに加え、言語面での情報収集も兼ねていると考えられる。しかし、このケースは当初の目的を優先し、内容面の情報収集として分類した。

この結果にも課題による違いが見られ、自分の経験や台湾の知識を活かせる課題を扱った協力者A・Bは内容面での情報収集のためにインターネットを使用することはなかった。また、2つの課題に取り組んだ協力者C・D・Eのインターネット使用を見ても、レポート①作成時は形式面よりも内容面の情報収集に利用されていた一方、自分の経緯や台湾についての知識を活かせるレポート②では主に形式面での情報収集に使用されてい

た（表5参照）。

つまり、自分の経験や既有知識を活かせる課題の場合には、インターネットの使用時間、特に内容面での情報収集のためのインターネット使用時間は少なくなると言える。

表5：レポート①②のインターネット使用の内訳

	レポート①		レポート②	
	内容面	形式面	内容面	形式面
C	12:23 (100.0%)	00:00 (0.0%)		
D			01:46 (23.1%)	05:53 (76.9%)
E	03:31 (73.4%)	01:17 (26.6%)	00:00 (0.0%)	03:36 (100.0%)

次に、どのような web サイトが使用されていたのかを見る。図1のように、内容面の情報収集については半分近くの時間が検索サイトに費やされており、次に情報サイト、ウィキペディアが頻繁に使用されていた。これは内容に関する情報を収集する際には、全ての場合においてまず検索サイトを用いて情報が掲載されていると思われるページを探し、その結果から情報サイトやウィキペディア等に移り情報収集を行っていたためである。

言語面での情報収集については検索サイトに半分以上の時間が費やされており、次に辞書サイトに多くの時間が費やされている（図2参照）。詳細を見ると、韓国人・台湾人の中で違いが見られ、韓国人協力者4名は全員が NAVER dictionary という辞書サイトを頻繁に利用していた。一方

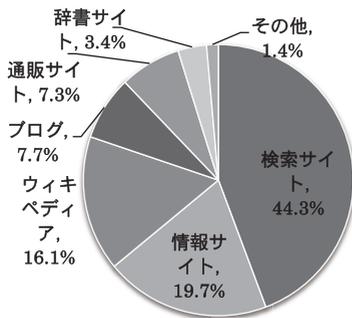


図1：内容面の情報収集に使用された web サイト

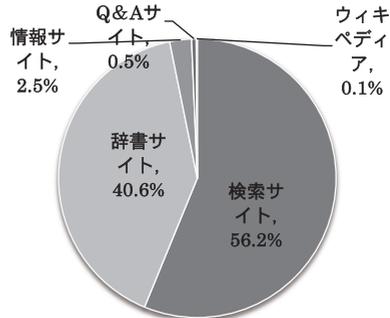


図2：形式面の情報収集に使用された web サイト

で、台湾人協力者は辞書サイトを最初に使用することはなく、検索サイトを用いてその表現の適切性を確認するか、もしくは、協力者B・Cについては、検索サイトの検索ボックスに調べたい単語と『日文』『中文』などの語彙を入れ、その単語の日本語訳、中国語訳が掲載されている辞書サイトを検索するという方法をとっていた。

次に各協力者がインターネットを使用する際、また、インターネット上から得た情報を使用する際にどのような問題が見られたのかを、内容面の情報収集場面と形式面の情報収集場面とに分けて見ていく。

4.2 内容に関する情報収集のためのインターネット使用の問題点

内容に関する情報を収集する過程を観察した結果、問題は（1）インターネットを使用する際と（2）インターネット上の情報を本文内に活用する際の両方にみられた。そこで、（1）（2）を分けて見ていく。まず（1）のインターネットを使用する際には、①情報検索の方法、②検索結果の見方、③参照するサイトの3点に問題が見られた。

①情報検索の方法

坂井（2017）はアカデミックライティングのために情報探索をする際には、ライティングの過程にあった探索を行う必要があると述べている。例えば、ライティングの前に行う情報探索は『手あたり次第方式』で『ブラウジング』を行うことで、できるだけ多様な視点からの情報を幅広く探索する必要があると述べている。また、ライティングの途中では、扱う事柄に関する先行研究を『芋づる式』に引っ張りだし、それぞれの関連性を整理していくような情報検索が必要であるとしている。ライティングの終わりには、累積された収集情報を自分のライティングに取り込み適切に配置するために、その情報をさらに深く探索する必要があると述べている。

しかしながら、本調査においては検索サイトを用いて日本語で情報探索を行う際には、書くプロセスの段階による違いは見られなかった。そして、多くの学生がどの段階においてもレポートで扱おうとしているテーマ、例えば、作品の分析であればその作品名のみを検索するためのキー

ワードとして利用し、そのテーマに関わる情報を幅広く『手あたり次第』に集める方式を取っていた。

例えば、協力者Cは書き始めの段階で『コナン』という言葉のみを検索ボックスに入れて検索を行っていた。そのため、『コナン（名探偵コナン）』に関する情報を幅広く収集しているように思われた。しかし、FUIでは、「日本語のトリックを中国語に翻訳する時は、普通そのまま翻訳して、下に注がついているですけど、始め時の作品で、翻訳者が中国語でも解釈するように内容を変更して、その作品ではトリックが違って『注音』を利用して、それがあって、調べたんですが見つからなくて。（協力者C）」と述べている。つまり、書くべき内容に関して焦点を既に定めて、その内容に関する過去の資料（先行研究）を探索しようとしていたことが分かる。しかし「コナンを調べて、いろいろ情報を見て、コナンの他の一つ作品を取り上げて分析するもいいかなと思って（協力者C）」とも述べており、インターネット上の膨大な量の情報を目にしたことで、当初予定していた内容から別のテーマに変えたほうがいいかもしれないと書く内容の焦点が揺らいでいる様子が見られた。協力者Cはその後中国語での検索に切り替え、その際には『柯南 犯人3人的理由』『柯南 基徳 雪』というような『柯南（コナン）』以外のキーワードも入力し検索を行っている。FUIでは、「情報見つからないから、中国語にした（協力者C）」と述べており、より詳細な情報収集のためには中国語での検索が有効だと考えたと思われる。加えて、日本語では『コナン』以外の適切なキーワードを想起することができず中国語での検索に至ったとも考えられる。

協力者Hも推敲段階において、レポートで取り上げている作品名『キスキス』のみをキーワードとして情報検索を行っていた。しかし、FUIでは「自分の考えの証拠のために、読んだ感想を出したかった。ブックレビューを探した（協力者H）」と述べており、これは、坂井（2017）がライティングの終わりに必要だと述べている他者の言葉を自分のライティングに取り込むための情報探索方法と一致する。つまり、段階に応じた情報

検索を行おうと意図していたことが分かる。しかし、実際には検索に使用されたキーワードが作品名のみであったため、ブックレビューのサイトにたどり着くまでに多くの時間を要していた。そして、「いろいろ見て、他のことも書いたほうがいい？思い始めて。でも、もう友達に（日本語を）確認した後なので、いろいろ迷って（協力者H）」と述べており、協力者Cと同様幅広い情報を目にするにより、書く内容に迷いが生じていることが明らかとなった。

上記は、表面的には段階に応じた適切な情報探索ができていないという点で情報リテラシーの問題であるように思える。しかし、FUIからは段階に応じた適切な情報検索を行おうと意図していたことがわかる。また、日本語で情報が得られず母語を使用して検索をやり直した際には詳細なキーワードを入れて検索していることから、日本語での適切なキーワードが見つけれなかったという日本語力の問題も影響している点が示唆された。

②検索結果の見方

検索結果から必要な情報が掲載されていそうなページを探す際に、結果の内容をよく見ずに、一番上に提示されている web サイトを選択し開く傾向にあった。例えば、協力者C・G・Iは検索するキーワードが一つの場合が多く、その場合必ず最初のほうにウィキペディアが表示されるため、ウィキペディアを多用する傾向にあった。FUIでも、「(検索結果) 見るとき、上のほうにあるは多くの人が見ている、だから、信頼できるページと思って。(協力者I)」「ウィキペディアは何でも書いてあるから(協力者C)」と述べており、検索結果の順序や情報量の多さを判断材料として参照する web サイトを選択している様子が見られた。また、日本語力の比較的低い学生からは「(検索結果の画面) 日本語、全部見るは大変(協力者I)」という声もあり、母語以外で表示された検索結果全てに目を通すためには時間がかかることから、上位に提示されているサイトを選択し開く傾向にあったとも考えられる。しかし、検索結果を見る際にはその

結果のできるだけ多くに目を通し、タイトルだけでなくその下に表示される web ページの要約文（スニペット⁽⁵⁾）を参考として、必要な情報がどの程度含まれているのか、求めていた情報と一致しているのか判断し、参照するサイトを選択することが必要ではないだろうか。

一方、協力者Eは検索結果を下までスクロールして全てを見ることで必要な情報が提示されないことに気がつき、検索ボックスに入力したキーワードが適切ではないと判断、キーワードを増やす、入れ替えるなどの作業を行っていた。入力したキーワードの適切さを判断するためにも、検索結果を1ページ最後まで見ることは必要だと言える。

③参照するサイト

②でも述べたようにウィキペディアは情報量の豊富さを理由に半数以上の協力者に利用されていた。しかし、協力者D・GはFUIで、「ウィキペディアを利用していいかわからなかった（協力者D）」「先生が使ってはいけないと言ったので不安だった（協力者G）」と述べている。また、協力者HはAmazonのブックレビューを利用していたが、これも「使っていいのか不安だった（協力者H）」と述べている。加えて、多くの協力者からどのサイトを使えばいいのか使ってはいけないのかわからないという声があがった。参照すべきサイトを選択する際に気をつけるべき点は2つあると考えられる。1つはその情報が学術的なものを書く際に参照するのにふさわしい質の良いwebサイトであるかどうかを判断することである。Stapleton (2005b)は、質のよいサイトかどうかを判断するための基準として様々な論文で最もよく取り上げられているものに、(1) 著作者が誰であるか (2) 作成者の権威性・評判 (3) 読者対象・目的 (4) 内容の正確性・客観性 (5) 情報の速報性・透明性、の5点があると述べている。この判断基準を知り、参照するwebサイトを取捨選択できるスキルを身につけることは重要だと言えよう。

もう一つは自身が必要としている目的に応じた情報であるのかを適切に判断することにある。ウィキペディアは誰にでも書き換えが可能で流動的

な情報である点で信頼性には疑問があるが、大まかな概要を知って、さらにそこから詳細な情報の検索に進んでいく足がかりとしては有効なサイトである。Amazon のブックレビューは一般的にその作品がどのようにとらえられているのかを示すことはできないが、一読者の個人的な感想を複数示す際の一つとして提示する際には有効だと言える。このように目的に応じた web サイトの取捨選択の技術を身につけることも必要であると言えるであろう。

次に、(2) インターネット上の情報を本文内に活用する際の問題を見ていく。

④引用方法

協力者G・I は最初に作品内容を紹介する文章を書く際にウィキペディアの文章をそのままコピーしレポート本文内に張り付け、その細部を書き換えることに非常に長い時間をかけていた。ウィキペディアは確かに概要が簡潔にまとめられており、文章そのものを利用しやすいと考えているようである。なぜ書き換えを行ったのかについては、FUI では「そのままの文章を使ってはいけなから修正した（協力者G）」「本の内容を紹介するのでウィキペディア（の文章）を使った。少し自分で書かなきゃいけない。だから変えた（協力者I）」と述べている。つまり、引用する文章を自分の文章内でどのような目的で提示するかを考えることなく、ただ「文章をそのまま使ってはいけな」という考えだけで修正を行い、自分の文章の中に取り込んでいたと言える。

協力者Hは読者がその作品をどのように捉えているかを裏付けるものとして通販サイト（Amazon、Yahoo！ブックストア）のブックレビューを使用していた。最初に複数のブックレビューをレポート内にコピーアンドペーストした後、悩んだ末にそれを一部変更したり削除したりするなどして大幅な書き換えをしていた。読者の感想を裏付けるものとしては、筆者が修正を加えるのではなく直接引用すべきだと思われるが、FUI によると「直接引用はあまりよくないと聞いて、できるだけ修正した（協力者

H)」と答えている。

どちらのケースも場面に關係なく「直接引用はすべきではない」という考えに基づいて判断がなされていたようである。しかし、どのように引用すべきかは二通（2007）、中村他（2016）でも指摘されているように、論の展開や引用の目的と関連付けて吟味した上で行われるべきである。本調査の全ての協力者が引用について自国、もしくは、日本で学んだことがあると述べている。しかし、直接引用・間接引用それぞれがどのようなものかは学んだ事があるかもしれないが、今後は場面に応じていつどのように引用すべきかの指導がなされるべきであろう。

⑤出典の明記

協力者Iは本の内容を紹介する際にウィキペディアの文章を使用していたが、出典を明記していなかった。FUIでは「これは事実なので、出典を書かなくていい、そう思った（協力者I）」と述べている。一方、推敲過程において『学級崩壊』の説明の部分には注を付けて出典を明記していた。これについては「（日本語の）チェックした日本人が、どこを見た書いたほうがいいと言って（協力者I）」と述べており、協力者I自身が出典の必要性を認識して判断していたわけではなかった。協力者Eも「出典をいつ書く、書かないはわからない（協力者E）」と述べており、出典をいつ書くべきかについて不安を持っていたことがわかる。リソースからの情報や文章を自分の文章内に取り込む際には、必ず出典を明記すべきである点もより徹底した指導が必要だと言えよう。

4.3 形式面の情報収集のためのインターネット使用の問題点

形式面に関する情報を収集する際には、①検索サイトの使い方、②検索結果の見方、③辞書サイトの使い方の3点に問題が見られた。

①検索サイトの使い方

半数の協力者が自身が考えた日本語表現が正しいかどうかを判断するために検索サイトを用いていた。これはweb上の膨大な言語データをコーパスとして、当該表現が一般的によく用いられるものなのかを調べるため

である。単語ではなく表現全体と一致するものを検索したい場合には、調べたい表現を「 ”」で括って検索するフレーズ検索⁽²⁾を行うと効果的であるが、この方法を用いていた協力者は一人もいなかった。例えば協力者Eは『秀逸な人材を失った』という言葉を検索ボックスに入力して検索していたが、「 ”」で表現を括ることなく検索したため、結果として提示されたページでは表現が分散して現れており、このフレーズ全体が一般的に使われる表現かどうかの判断ができなかった。これは副田・平塚(2016)でも指摘されている点であり、検索サイトの効果的な使用方法を知る必要があると言える。

②検索結果の見方

協力者Bも『国民に浸潤する』という表現が正しいかどうかを判断するために検索サイトを用いていた。そして、検索結果にこの表現を使用しているページが表示されたことで、これが適切だと考え文章内に使用していた。しかし、検索結果に表示されたとしても必ずしもこの表現が適切であるとは限らない。検索結果内に表示されるヒット件数を見るなどしてその表現がどの程度よく使われているのか確認する必要がある。また、検索結果を見る際に、検索したフレーズだけではなくその前後の表現も見て、自分の使用したい用法として使われているのか確認する必要がある。

一方、協力者Fは検索した表現が検索結果に表示されても、画面を上下にスクロールして何度もそれを読み直し、最終的にその表現を使わないケースが見られた。FUIでは「(表現が)画面に出た時も、不安がある、そのときは使わない(協力者F)」と述べている。また、検索結果から検索した表現とは異なる表現を見つけ出し使用しているケースも見られ、それが適切な言語使用に繋がっていた。つまり、検索サイトの結果に頼り過ぎることなく、検索後にもう一度自分の日本語の知識とも照合して適切かどうかを判断し、表現を取捨選択することが必要だと言える。

③辞書サイトの使い方

4.1でも述べたように、全ての韓国人協力者がNAVER dictionaryを使

用していた。これは「NAVER dictionary には用例が多く提示されているから」だと述べている。実際、韓国人協力者はこの辞書サイトを使う時に常に複数の用例を確認しており、その結果見つけ出した表現を文章内で使わないケースも見られた。一方、台湾人協力者は特定の辞書サイトを使うことはせず、検索サイトで調べたい言葉を検索し、その結果から辞書サイトに移って調べる様子が見られた。このような場合、用例のほとんどない辞書サイトを使用しているケースが多く、結果不適切な言葉の使用に繋がっていた。ここから、まず特定の使いやすく用例が多く掲載されている辞書サイトを知っておくこと、また、辞書サイトを使う際には用例を見て適切な使用法を確認することが必要であると言えよう。

5. まとめ

以上のように、内容面での情報収集については検索サイトを用いるときに段階に応じた検索ができていない、参照すべき web サイトの取捨選択ができていない、目的に合わせた適切な引用ができていない等の問題が見られた。また、形式面での情報収集の際には検索サイトを適切に活用できていない、検索結果として提示された表現を取捨選択できていない、台湾人留学生は適切な辞書サイトを使用していない等の問題が見られた。詳細を見ると、これらの問題は情報リテラシーと日本語力が相互に影響し合っ
て起きている問題であった。日本語のアカデミックライティングの指導の中で情報リテラシーが積極的に扱われることは少ない、もしくは、情報リテラシーは別に指導されることが多いが、これらは書くプロセス全体を見て、統合的に指導されるべきではないだろうか。

また、FUI からはレポート作成者自身もリソースとしてどのような web サイトを参照し、そこから得た情報をどのようにレポート内に取り込めばよいのか難しいと考えていることが分かった。本研究の調査協力者の多くが自国、もしくは、日本で情報リテラシーや引用について学んだことがあると述べていたが、各段階に応じた web サイトの選び方、具体的

な場面に応じた適切な引用方法の指導を今後さらに強化していく必要があるだろう。

今回の調査では文学作品を分析するタイプの課題を扱っていた学生が多かったため傾向に偏りがあったかもしれない。インターネット使用状況は課題による影響が大きいことが明らかとなったため、今後は他の種類のレポート課題を作成する際にも同様の問題が見られるのか調査を進めていきたい。

注

- (1) 「パッチワーク文」とは、Howard (1995) によって示されている「盗用」の分類の一つで、「言い換えたり要約した文章が、原文と似すぎている」(吉村、2013、p.20) 文章のことである。
- (2) 「フレーズ検索」とは、検索ボックスに検索したいフレーズを“ ”で括弧で入力することで、入力した通りの順序でそのフレーズが含まれているページを検索する方法のことである。
- (3) ELAN はビデオ画像や音声データに注釈をつけていくソフトウェアである。近年、会話分析、行動分析など幅広く用いられている。
- (4) プリントは、レポート課題について記載されているもの、課題が出された授業で配布されたもの、日本語の文章表現の授業で配布されたもの等が使用されていた。
- (5) 調査協力者に事前に普段どのようにレポートを作成しているか聞いたところ、寮で友達と並んでレポートを書くことも多いと述べていた。そこで、友人と一緒にレポート作成を行うことを許可したところ、全ての学生が友人と2人で向かい合わせに座り、レポート作成を行うことを希望した。そのため、わからない点について友人に相談するケースも多く見られた。
- (6) 「スニペット」とは、検索サイトを利用した際にその結果のページに表示される web ページの要約文のことである。

付記

本研究はJSPS 科研費基盤研究 (C) 「アカデミックライティングにおける適切なリソース活用のための教材開発」(研究代表者:副田恵理子、JP15K02646)の助成を受けたものである。

引用文献

- Acar, A., Geluso, J. and Shiki, T. (2011) How Can Search Engines Improve Your Writing. *CALL-EJ*, Vol. 12, No.1, pp. 1-10
- Conroy, M. A. (2010) Internet Tools for Language Learning: University Students Taking Control of Their Writing. *Australasian Journal of Educational Technology*, Vol.26, No.6, pp. 861-882
- Eisner, C. and Vicinus, M. (2008) *Originality, Imitation, and Plagiarism: Teaching Writing in the Digital Age*. Ann Arbor: University of Michigan Press
- Howard, R. M. (1995) Plagiarisms, Authorships, and the Academic Death Penalty. *College English*, 57, pp. 788-806
- Jones, S. (2002) Internet Goes to College: How Students are Living in the Future with Today's Technology. *Pew Internet & American Life Project*, Washington, D.C.
- 鎌田美千子 (2017) 「言語教育から引用の問題を考える—パラフレーズを中心に—」 東北大学高度教養教育・学生支援機構編『責任ある研究のための発表倫理を考える』東北大学出版会, pp. 107-127
- 中村かおり・近藤裕子・向井留実子 (2016) 「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集 (電子版)』
- 二通信子 (2007) 「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『2007年度日本

語教育学会春季大会予稿集』 pp. 283-284

坂井素思 (2017) 「情報を調べる」滝浦真人, 草光俊雄 (編著) 『日本語アカデミックライティング』放送大学教育振興会, pp. 82-98

副田恵理子・平塚真理 (2016) 「韓国人上級日本語学習者のレポート産出過程の分析」『藤女子大学文学部紀要』第53号, pp. 43-56

Stapleton, P. (2005a) Using the Web as a Research Source: Implications for L2 Academic Writing. *The Modern Language Journal*, Vol. 89, No. 2, pp. 177 ~ 189

Stapleton, P. (2005b) Evaluating Web-sources: Internet Literacy and L2 Academic Writing. *ELT Journal*, Vol. 59, No. 2, pp. 135 ~ 143

吉村富美子 (2013) 『英文ライティングと引用の作法：盗用と言われないための英文指導』研究社

吉村富美子 (2017) 「表現の盗用—倫理問題と呼ばれる語学問題—」東北大学高度教養教育・学生支援機構編 『責任ある研究のための発表倫理を考える』東北大学出版会, pp. 129-146

Zulfitriani, M., Salam, U. and Novita, D. (2014) An Analysis on Students' Use of Online: Resources for Written Assignment. *Jurnal Pendidikan dan Pembelajaran*, Vol.3, No.12, pp. 1-12